仇討
高砂代松
歌麿画
燒尉助作

文化六

へ13
2378
214

文化元年
遠 2378 214

一對男時花歌川　天竺德兵衛物語
朝茶湯一寸口四　今昔小町譚
却説浮世之助話　松縁高砂話
先讀三國小女郎　其寫繪戯俤
昔語丹前風呂　戀女房讐討双六
濱真砂石川草紙　躾草娘庭訓

播磨路よまえ〜。加古川教心寺の開基。教信上人の未鹿児川
教信といひし時。出家して諸国を修達〜。深山の怪迷女の亡霊
邱南鹿児川にあり。昔の物語と。近ごろ流行草紙とつゞくく。
祢ろの鳴物よ。四てんでゝる。幽霊も。焼酎火。かけぢん〜ろの
おど〜る。三弦ろの白雛子ハ。敵討の合方とこゝろえ。歌舞妓
めらる国家の仇討。御家狂言の発端ろ。御代長久の納まで。
哥川氏の筆勢にあ〜い〜。むろゝ春の奥をもなつかしく水の
ゆくとこひ祢ゝよのぞ

東都高砂ノ街
戯作者　姥　尉輔編

北方有佳人
舞歌
民部省
教房妻
都九条の遊女
後神崎の傾城宮城野
門口ニ
日ハ
沾州
鹿児川
民部の省教房
之長男光明丸
土佐ニ出家して
真光法師

嫉妬念深祈夜叉
鹿児川教高之後妻
花次郎教信実母
明石御前
深山小
蓮谷

貞婦丸後墓兜子
亡人无意与乳房
鹿児川
民ア省
教房妻
薗生の前
播州楫穂之住
高梨政太郎 友風
後 高梨吉内左門
友重

明石御前の物
岩淵悪
五郎
時国
強盗自猛
誇代威
雷鳴剣
後 類天国

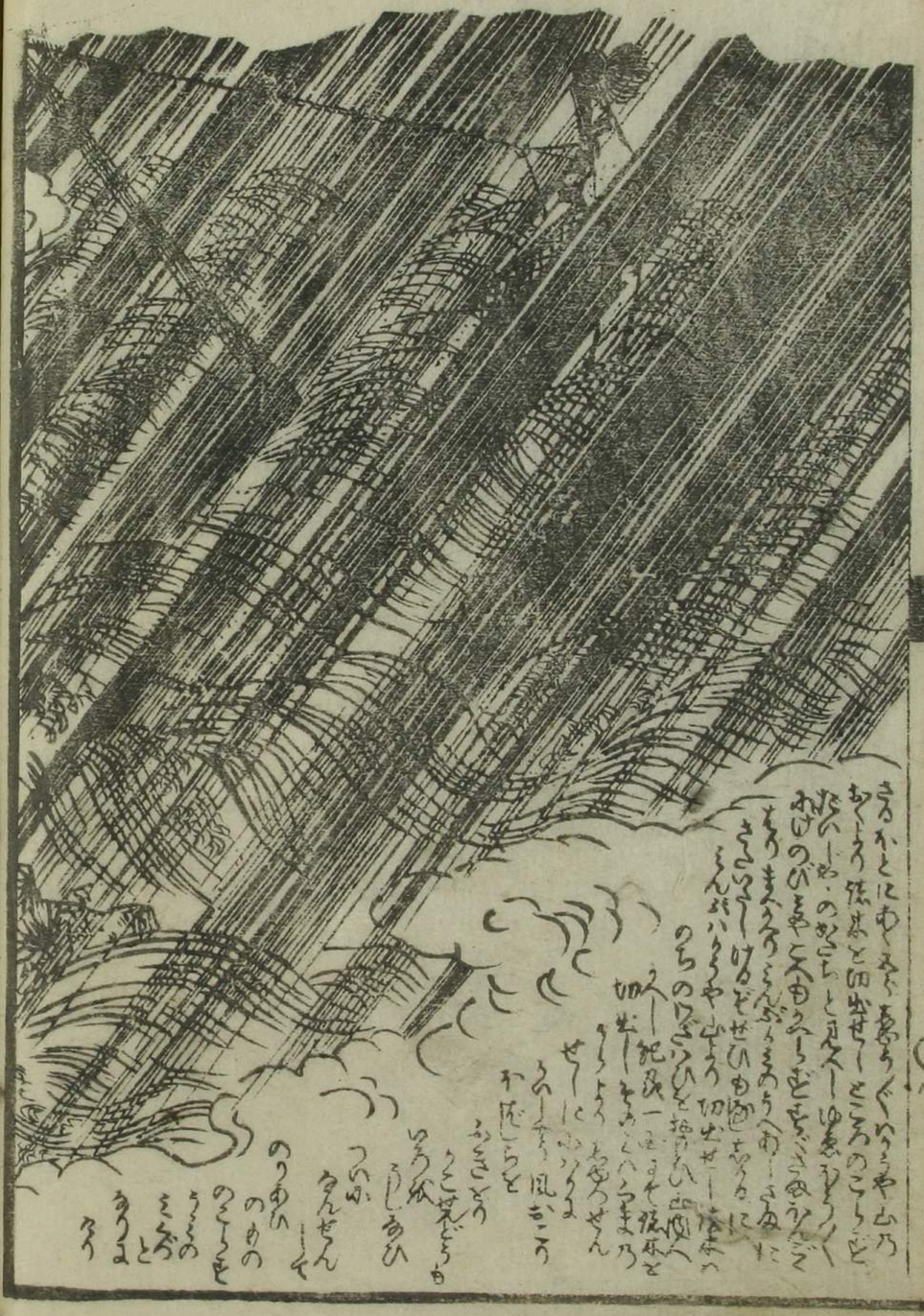
著
迷
街
苔
髑髏
古川
城詰
牧
也
蛇登
蟬登熊
夜
鹿児川登次郎 教信
出来
加古の 教信法師

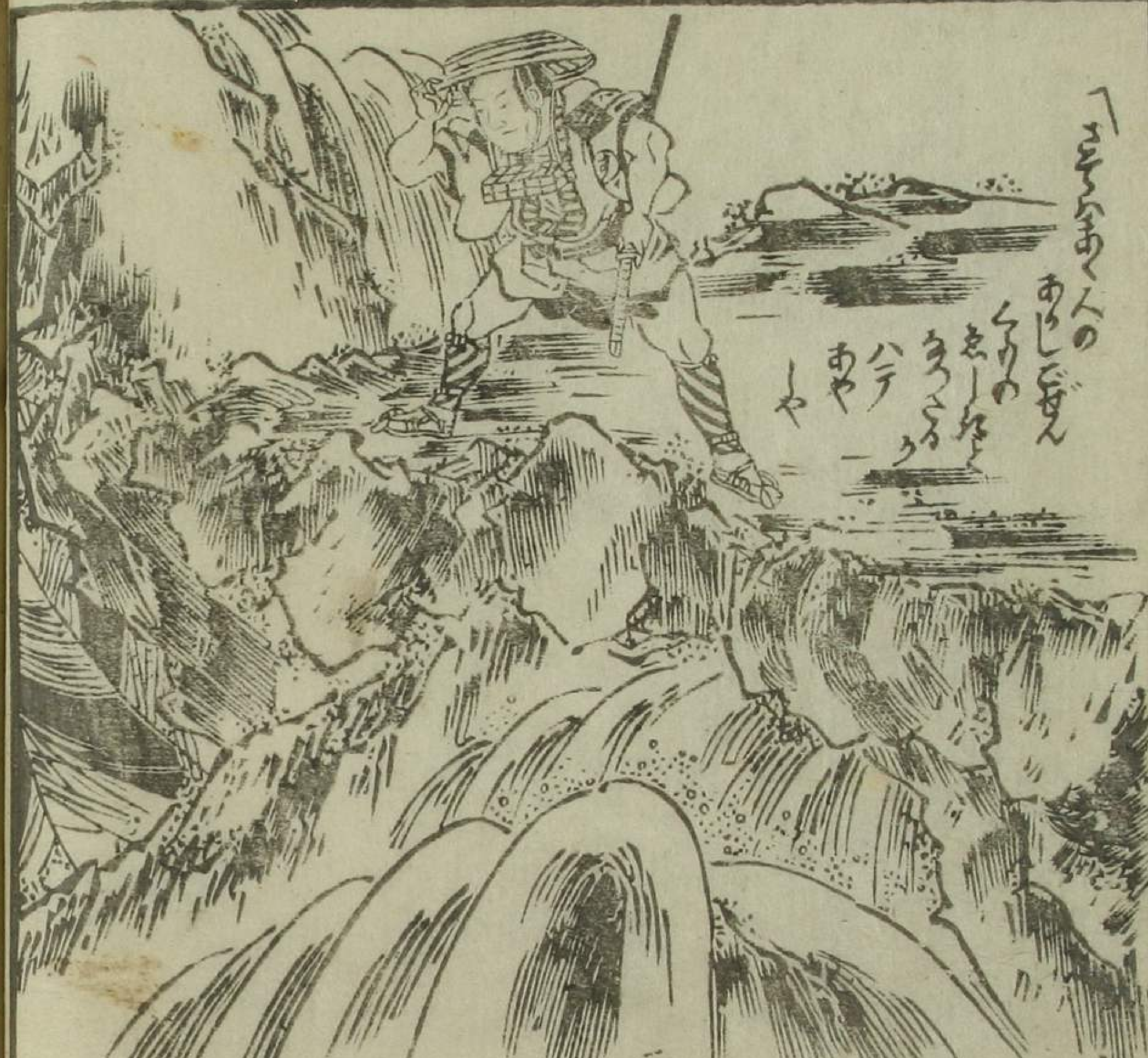
播磨国
蛾ヶ洞の山神
春有地底 行草街
秋張草上 絲挿人
然而二心誠忠
鹿児川民部省
教房僕 須摩藏

吉内

えんぶハやうく と女人が
いさめあつきさきをくへ
おもむき山中にいろそ
伝木をきんをするに
山月にうぐき大木すくあ
このこゑあくるりのひろくん
これまで伝木をきうぐるの
うやさんのおく家
ものじやうたるあんよ
人ごろそぶむちん
おそれきうるこゝを
きんじたりこれ
ろきみうのちろう
行ふぶむちの
もをれあんん
やと
えんぶよ
こゝろそ
えやの
山中よ入と
えんぬをろうこ
伝木を
きりと
どうでもえきまこぬ
たちよぶかうえ
あるまうハうえ
ふうさくさんど
あるこんやのうちふ
しうこゝをぶとぶめく
あのこゝろの
えんぶろ
ふぶる
とぶど

むをよ
よんぬかた
たあ川へ
おとー
きちう
うらく
ぬぶさんと
きりうさせーに
ゆぶや人えの
国にん
ざいかくと
足ぬれとも
悪みう
ちあうく
の
国うハさも
すさぬーに
うんむこと
ぬくれい
悪みう
大きにおそれ
ちあうぐ山をあげぶう
ちやこんとちいあげうう
ハぶんの
やうぬ
えうだを伝木
こゝをこゝーに
うぐこゝを国
けりちぶこん
ぶくこゝぶ
えうーに
ちうー
ぶりくぶうぶこうてぶ
ぶりくうなりの
ちあく山をあげよう
ぶこうる
けちるも
ある
ぶる
えんぬ
あけぶん
けくいも
あけよう
あけるよ
ちあうく
ひんぶう
ぬぶ





さてもあくそうハやくもあらハされ
一くわんむすびの法しく
おこなハれしがかれ古門の人
どんぜうのかどもそうりだし
のちぞひめのおゝし二ぜんへ
えんぶおちうぜ絵さいけれ
あくそうをとうりんとせし
ちうし花けらハれい丸を
つかせんとおひさうちれども
花けらむねんさゆうの
ぬのわかりかのうらおそれつき
おふそんぶおくそうがうりの
をう重てとめひくしれ
ちうそじとおりくい丸と
二人のともおりそみぞい
そのとものまへのぞくへいさえあれ
えんぶのくけらきをそうすい
さいのうへハ丸ハふきく
つかせるがじぶんどうありと
やさをふとおりしぜんさいて
あくませんをちとまのゝせがれ
しやういんあるまゝしハ名れ
ちもしとるやさんもおふとかる
えんざんにふもあかりしけよ
山針のおとうありいふし
ひとともつをさくけ
しかもちかしぶくのが之んを
丸そしかふかしか針み
ちつて二人のまくびを
ごろうとそしもんぶ
ちそしてうやさせかんと
まのみくらしまつのくる

▲えんぶどのを
ひそかよ
あの経かその
やうくにえへる
よるのうち
まうそく山針を
いのるゆへを
あらいのくんと
こあらうちうち
わうの内より七八尺の
くもあらいれまうてちくを
ひつくまへ山ありえんどう
そうとおくさんしが さてひとくちおのんさん
さけびこえしてそのさいゆえんどあのわるがさちうまぬち
くもハあつし ぜんのがさちふ てんじ
いのち播をけらてくとひさるをもぬぞうあゆしてあとをとつけてあろひけれ

三七日があらぐうちきうりて
いのりぢあうるみ
まんぐゑんのま
あうべ
とある
ぞさん ▲

國貞画

姥尉輔作

ひとゝもしてむこあさいはどいうぐせんと
きをうしろひしをうりうゝあぶないにてくゝり
いぐくろうりうゝちんなをりくきこるとゑんゝ
ろきゝこゝをうちおとゝゝおけもくぐけて
ゝちゝうり吉内れたつうちがいこうげ
いぐるとゑんゝがいのうゝおとゝ
あうまといぐれをつくゝとゝちゝ
ありさゐよおろりのめんくいろゑ
うしるひ一人ものこゝぎおけゝせうり
吉内れたつのちぐいそのをのれのこん
ろひゐやゝやあうゝをいぐれ
ちぐさをあゝくるぐ
中山ちん
たゝりゆくこそ
ふゝぎ
ろうり

吉内
さんりんの
ろうりうゝ
あうろゝ
いぐれ
中山ちに
たゝり手り
女のこゝり
ゆそせうに
あめふかゝらんと
いふよちゝよけゝち
きもをつぶゝ上人よかくゝと
つけゝれいぢゝ出むゝひ
ゑんゐ吉内さんのん
ありさゐおこゝゐ世を
さうつるよるふゆへまゝひ
きゝるゝいそのとれた
女のこゝれるまひゆそ
こゝゝていまくゝれいかこり
ゝんぶゝつまそのをと
ヤもりのゝりきのん
まゝゝゝもゝあくゝゝと
ゝふりのゝゆいをにかゝり
世をまゝりこづゝちの
おこゝひゝうゝ
うゝきえづく

▲ちうしんぐらのくるしみ

ちらのかいちう

あんどをとりてあるく
七月の十六日よりとんしゃうのあるくの
そこのさいまんのうちやの
あのかやとまはてあるくまん
ぢうろんよりちやうろん
あるくちやうろんの
十七日のあけがのハ
ゆうのあるくくらるる
しゃうとうろうあるくろうはんきやうよ
うちはあけがのいたずのはまのゆめのっ
ちやうたこしやくとあるくめいどのもちく
めいどのこゝろはあくまとちがひ
のこれるあやどりのあるくごゝろ
ちがるそでのつゆ
ひとりのめぐりあるくり
ちうのあのくもさいてあるき
らりさまくてくるも
あるきあるくごゝやうのあく
いやとしのうぐあるあるき
さまうろうくまゝあびい
ゆーかんとともちゝね
どもひとびうとせ
ちうさくの「サアヤアヤアヤア
「ちゝぐろうろ
ちゝとのかゝくろ

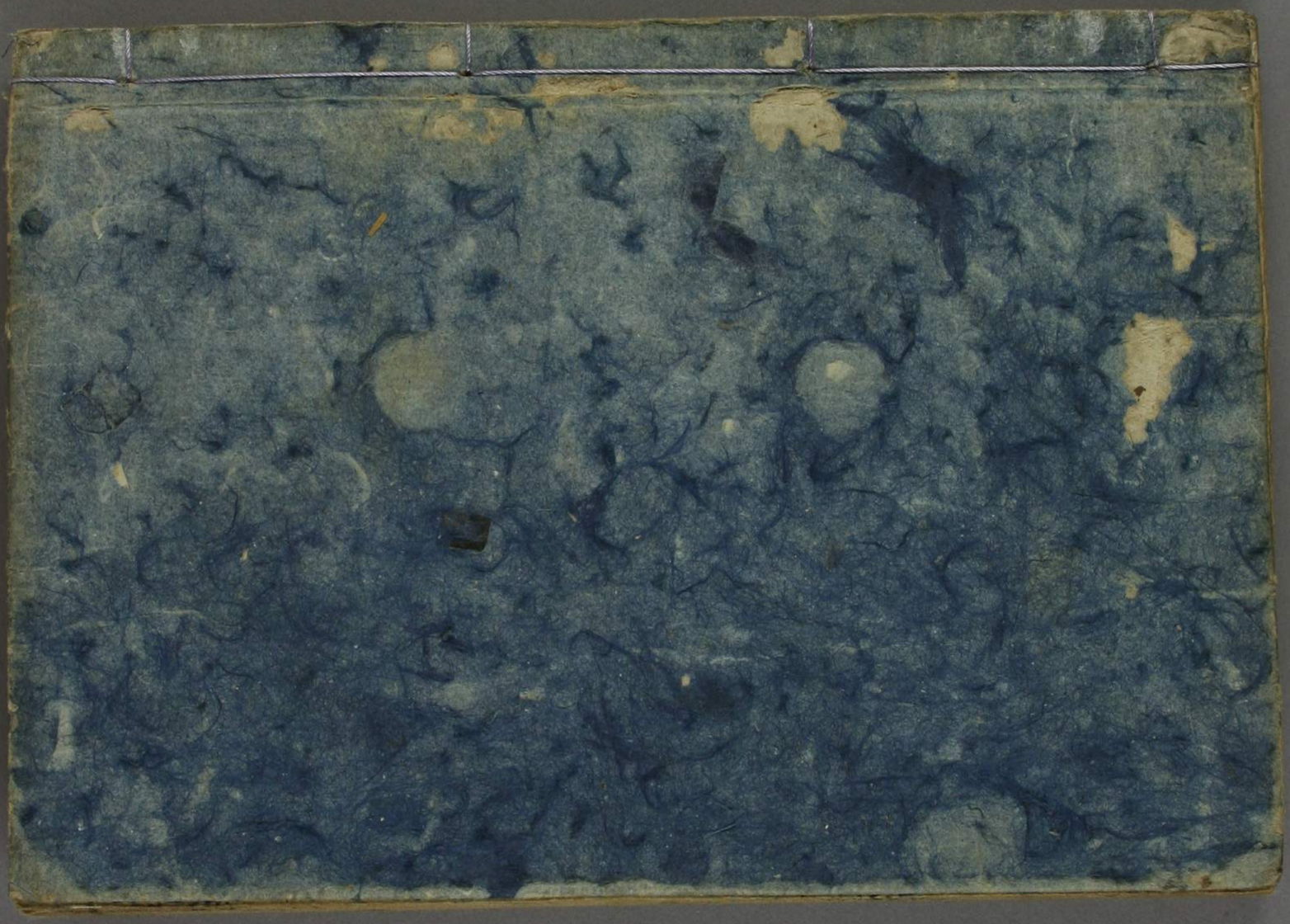
ちうろぐ
ちのヤアヤアヤア
ありくの

千
「とゝさんのうきうきうどーヤ
「あのいきんおれひとりぢりのるあろさ

「をのれあくまにげハるを
「とんぐ
「とんぐ

高砂の恋

松根よるべ
解脱
枯花をあれ
花衣
雪をめぐる
森の紙
ゆんくさのく
さうーのまい
あさをうつてあ
四のさまりもうぎのかと音
こんれのとこさろづき
ちまぐいのあうちいさん
あいもりわ〜ねとあ〜く
けりくさきうちわれりまあ
るさどのう〜いのあ〜ま
こがれていさんせんがんアをうぐうど
さぐやう〜んのまとあ〜よ〜ろ
つきとみ〜のあんうどよてとてもあよ
あふあひあひのまりのりとまてねんらんのやんやう
とげ〜ぶりんのかまれ〜ゆ代のやさがよとんけて
あんさあうあんとどりのさうへだんぐいふあきの
とぶきをめでさきまのりの〜りもきうり
ろうるうきをかり〜めあそびされりらんのうへ
れのやうがんひとうよこいねどのひ〜とてまりてりうと
けあんのえんりとうやまりてりうと

国貞画

姥尉輔作